

## 楽曲解説

10/16(日) 第886回オーチャード定期演奏会

10/20(木) 第887回サントリー定期シリーズ

マスカーニ(1863-1945)

歌劇『イリス(あやめ)』(演奏会形式・字幕付)

第1幕(約60分)

第2幕(約50分)

第3幕(約20分)

### 歌劇『イリス』の誕生

1890年5月17日の『カヴァレリア・ルスティカーナ』初演が、26歳のピエトロ・マスカーニ(1863-1954)を、一夜にして人気作曲家にしてしまった。マスカーニは『友人フリッツ』(1891)、『ランツァウ家の人々』(1892)、『シルヴァノ』(1895)、『ザネット』(1896)と、オペラをつぎつぎと世に送り出す。

どの作品も『カヴァレリア』を生むきっかけとなったオペラ・コンクールを主催した出版社ソイツォーニョが、上演と出版にかかわっていた。当時のイタリアでは出版社がオペラの制作に携わっていたのだ。だが最も有力な出版社で、ヴェルディとの協力関係で知られるリコル

ディ社が、人気作曲家マスカーニと新たな関係を結ぶ。新作はリコルディとの協力のもとに作られる。そして総帥ジュリオ・リコルディが選んだ台本作家が、ルイージ・イッリカ(1857-1919)だった。

『ラ・ボエーム』『トスカ』などのブッチェーニ作品や、ジョルダノー『アンドレア・シェニエ』、カタラーニ『ラ・ワリー』の作者として今日までその名を知られるイッリカは、日本を舞台とするオペラを提案した。マスカーニもこの提案を受け入れて、新作に取り組む。

ペーザロ音楽院の院長に就任していたマスカーニは、指揮者としての評価も高かった。音楽院の仕事をこなし、指揮活動も行ないながら、イッリカと協力して、新しいオペラの筆を進める。順調に進み、初演の場所も『カヴァレリア』や『友人フリッツ』と同じ、ローマに決まった。



## 『イリス』の物語と音楽

**第1幕 富士山に見える、イリスの家の庭** 夜明けとともに太陽の讃歌が始まる。壮麗なこの合唱は、最後の場面でもう1度繰り返され、このオペラの音楽的な中心を成している。讃歌ではあるが、詞の内容が太陽神のモノローグであるのに注目すべきだろう。見えない太陽神が、オペラの重要な役割を担っている。

庭に出てきたイリスは「淋しく、怖い夢」とモノローグを歌う。自分の人形が病気になる、太陽の神に直してもらった夢だ。様子をうかがっていた好色な若者大阪と女術の京都が、イリスに目をつける。

川で洗濯をする娘たちの歌に、花を愛でるイリスの歌が加わる。だが平和は続かない。やってきた旅の一座が人形芝居を始めるのだが、これは大阪と京都の、イリス誘拐の手段だった。劇中の娘ディーアは、父によって遊女として売られそうになって祈ると、太陽の子イオールによって救われ、死の世界へと導かれる。イリスはイオールに扮した大阪の、「窓を開けなさい」と歌うセレナーデにすっかり夢中になってしまう。

仮面をつけた芸者たちの踊りがくり広げられているあいだに、眠らされたイリスは京都の手に落ち、連れ去られて

しまう。イリスの盲目の父チェーコは嘆き、連れて行かれた吉原に追っていかうと決意するのだった。

**第2幕 吉原の遊郭** 芸者のハミング（「あの娘見たさに」と記されている）が聞こえている。眠るイリスを見守る京都のところへ大阪がやってきて、二重唱が始まる。早くイリスをなんとかしようとする興奮する大阪をなだめ、京都はまず贈り物やお世辞でイリスをその気にさせるよう勤める。

目を覚ましたイリスは、何が起こったのか思い出しながら「ずっと夢を見ていた」と、心細く不安な気持ちを歌う。

京都に連れられて大阪がイリスの前に姿を見せた。イリスはその声を聴いて、自分が心を奪われた太陽の子イオールのものだと気づく。繰り返される二重唱の中で、イリスは声の主の正体と、その欲望を知ることになる。大阪の快楽への誘いを聞いたイリスは「まだ小さな子供だった頃」と、寺で聞いた大きなタコに犯されて死ぬ娘の話を思い出す。なおも「おまえの手を」と口説いても、イリスが拒み続けるので、あきれた大阪は、娘を家に帰すよう言って去る。

しかし京都によって綺麗な着物を着せられたイリスは美しく、街ゆく人が

賛美する。その中に、娘を探しに来たチェーコがいた。だが再会した娘を、父は汚れたと言って責める。絶望したイリスは窓から飛び降りる。

**第3幕 谷間** 月を愛でる歌を歌いながら、くず拾いが通りかかって、横たわるイリスを見つけた。てっきり死体だ

と思い込んで着物をはがそうとしたが、動くので驚き、逃げ出す。

死にゆくイリスに、大阪、京都、そしてチェーコの勝手な言葉が聞こえてくる。イリスは生まれ育った小さな家を思い出し、太陽の輝きを想って死んでゆく。太陽讃歌が高まり、あたりにあやめの花が咲いて、イリスの身体を包む。

- ・『イリス』の中心を成すのは、オペラの最初と最後を彩る、大規模な太陽讃歌だ。
- ・イリスは登場のモノローグから生きる不安を抱え、夢に意味を見出そうとしていて、それが第2幕で具体的な怖れになってゆく。
- ・人形劇の中でイオールとしての大阪が歌うセレナーデは、イリスの心を捕える歌として重要で、単独でも歌われる。第2幕でイリスにせまる歌にも、誘惑者大阪の魅力が聴きとれる。

**【楽器編成】** フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チンバasso、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、グロッケン、タンブリン、大太鼓、タムタム〔大・小〕、等）、ハープ2、弦楽5部  
バンド：トランペット4、トロンボーン4  
※上記は今回の演奏上の編成

ほりうち・おさむ（音楽評論家）／東京生まれ。1970年代からオペラとクラシック音楽に関する執筆活動を行い、雑誌や新聞に寄稿するほか、テレビやFM放送にも出演してきた。近著には「オペラ入門」（講談社）、「モーツァルト・オペラのすべて」「ワーグナーのすべて」（平凡社）がある。